

「子どもの読書と『探求学習』」

講師 永井悦重 氏 (山陽学園大学特任准教授)

毎年のこの講座は、県内小中学校司書が多数参加されていたが、ボランティアの方々の参加も多いためか、読み聞かせや読書支援に関する内容の講演がほとんどだった。けれども、今年度2月の県議会、教育警務委員会で県教育委員会が「県図書館協会などとも協力して開催している研修会の周知に努め、より多くの小中学校の学校司書に参加してもらうよう努力していく」と答弁されたこともあってか、今年は学校司書が参加しやすい日程に開催され、学校図書館の役割と可能性を学ぶという画期的な内容の講演会が企画された。

ご講演いただいた永井さんは、26年間も学校図書館先進地の岡山で専任・専門・正規の学校司書として勤務され、岡山の実践を全国に知らしめ、全国の学校図書館充実をけん引してくださった実績のある方だ。現在は、阪南大学、岡山大学での非常勤講師や山陽学園大学で特任准教授を努められるなど、司書養成にも力を尽くされている。

この講演会は前評判も高く、当日は約170名の参加者で会場は満席だった。県内のいくつかの自治体で、学校司書の公的研修に位置づけられたことも有難い特例となった。富山ではなかなか聞けない内容に、大きな期待をもって参加された方が多かったと思うが、期待どおりの示唆に富んだ充実したお話だった。以下、講演内容をいくつか報告する。

○なぜ探求学習か？

教育のカリキュラム自主編成運動等を担ってきた民間教育研究団体が「子どもの問いに響き合う以外に教育実践を構想することは不可能」であると、学校教育の現状を分析している(教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生』かもがわ出版2014年)。そもそも、民間の教育研究団

体が提案した「総合学習」が、1998年版学習指導要領において「総合的な学習の時間」として具体化された事実がある。「生きる力」は、もともと現場が提言したことであったというのは重要だ。貧困、ネット・ケータイ時代を生きる子どもたちの状況が引き起こす学校現場の困難さを背景にした現在、探求型学習はきわめて現実に即した教育方法論である。

子どもの問いを大切にし、それにかみ合う、ひびき合う以外に授業はなりたない。分かる喜びと意味の実感を通して、教えから物との対話や人との仲間作りという学びへの転換こそが探求型学習の根拠と言える。

○探求学習のプロセス

探求学習は、探求の過程に重きを置いたところが特徴的と言える。豊かな授業が存在することこそが学校の存在意義であり、探求学習を作っていくプロセスにこそ、学校図書館が有効に働くことができる。学校図書館の働きと豊かな授業を作ろうとする教師の思いがすり合わされるところに、相乗的効果のある協働が生まれる。

○探求学習と読書の相関関係

学校図書館で日常的に保障される読書の積み重ねが資料や情報を読み解く力を培い、授業で図書館や資料を活用することで読書意欲が触発されるというふうに、「読書」と「探求学習による調査・研究」は相関関係にあると言える。

○資料提供と知る自由を保障する図書館の役割

図書館の基本的な機能は、資料提供(情報提供も含む)である。資料提供とは「図書館の相互協力

を含む図書館の総力をあげて、収集した資料を」利用者へ供することであり、具体的に言えば、閲覧、貸出、読書案内、複写サービス、リクエスト、予約サービス等の「資料提供サービス」とレファレンス・サービス、資料検索援助サービス等の「情報サービス」を包括した図書館サービスを指す。

図書館ネットワークが構築された資料提供が子どもの知的好奇心を触発し、知る自由を保障しながら、子どもの視野を広げ、世界を広げることができる、それが図書館の機能と言える。教諭との専門性のぶつかり合いが教育活動との連携であり、それが教育課程の展開に寄与するという本来の意味である。

資料提供は、図書館に常駐する専任・専門の司書がいなければ成り立たず、学校では、児童・生徒、教職員がこの図書館サービスを楽しむ。図書館情報学を学び、フルタイムで仕事をする学校司書がいてこそ、学校図書館は機能する。

司書教諭は、学校司書によって機能する学校図書館を学習活動に生かす教師である。学校司書と教師の協働によって、学校図書館は学校教育の中に根をおろすことができる。

○探求型のプロセス（調べるプロセス）とは

①テーマを絞り込み、決定する

まず、1冊の本を読みこみ、ブックトークや専門家の話なども参考にして、テーマを決める。テーマが大きい場合は、その中の何が1番知りたいテーマなのか、しっかり考えて絞り込むことが大切である。教師が子どもにテーマを押し付けてはだめだし、子どもに丸投げでもだめだと言える。

元東京都立高校教諭の鳥山氏は、学校図書館などを活用した世界史の調べ学習や発表授業を柱にした魅力的な授業の実践者として有名である。鳥山氏は生徒がテーマに関心をもつために、疑問や驚きを生む問いかけや「ひっくり返し」を行い、図書館の利用方法や、資料を批判的に読み、情報を分析し、発信する力を育てるなどの問題意識を持って歴史的な思考力を育てる授業を展開した。

「ひっくり返し」とは、「いままで、てっきりそうだと思っていたことが、そうではなかったことに気付く、もっと奥が深いことを発見する。そう

いうことは、小さいころは、しょっちゅうであったにちがいない。そして、ひっくりかえるときは、自分のなかにあるものとぶつかりあって、自分の中で自覚的に、別のものがつくりだされていく、自分の行為としてひっくりかえしが行われる、主体的な動きなのである」と、『授業的な思考力を伸ばす授業づくり』鳥山孟郎他著 青木書店」では解説されている。これは、ブックトークにも使用できる手法だ。

紹介された『授業的な思考力を伸ばす授業づくり』には、「鉄砲を伝えたのは誰か？」というテーマで資料を批判的に読み解く中学生の授業が紹介されている。通説となっている「日本にはじめて鉄砲を伝えたのはポルトガル人」の根拠は、南浦文之『鉄砲記』（1606）である。けれども、この書は60年後に書かれていて、祖父の功績を顕彰するために領主がつくらせたもので、資料的価値が高いとはいえない。他資料のポルトガル人が書いた『諸国発見記』などに当たると海賊の「倭寇が伝えた」とも読み取れる。資料を分析した後、ポルトガル人か倭寇のどちらだと思えるか、根拠をあげて自分の意見を述べ合うという授業展開になっている。

（付記：報告者）

②テーマに関連した情報を集める

レファレンス・ブックから専門書、データベース等の多様な資料から集めることが重要。

③複数の資料・情報の読み比べ、情報カードにメモ

信頼性の高い資料、違う見方もチェックする必要がある。

④情報カード等を活用して、

様々な情報を要約したりまとめたりしながら自分の文章を作る。引用文は「 」の中に入れ、出典を明記する。

子どもが丸写しにしてしまうのは、ポイントがつかめないからで、要約は練習が必要。中学卒業

書名
著作者名
出版社

までにはできるようになってほしいので、統計の読み方なども含めて授業で取り組む必要がある。丸写しでなく、自分の言葉で要約できる力の育成が望まれる。

また、参考文献（新聞、雑誌、ネット情報も）も忘れずに書かなければ、根拠のないガセネタになってしまいがちである。本の情報をそのまま使う場合は「 」の中に入れ、出典を明らかにする。丸写しは著作権に触れるルール違反行為であることを理解しなければならない。

⑤発表する（レポート、論文、新聞、模造紙、パワーポイント等）

⑥ふりかえる

1～5までを振り返って、次の調べ学習に生かす。問題意識をもってまとめても独りよがりになりがちなので、他人の質問に答えることはとても必要。

○学校図書館とメディア・リテラシー

教育評論家の尾木直樹氏が2008年に実施したアンケート調査によると、中学生の約7割、高校生の約6割が小学生のうちにケータイやパソコンでインターネットを使いはじめ、中学生の2人に1人、高校生の約8割が自分のケータイを持っているという結果が出ている。2014年現在では、その状況は加速していることが容易に想像できる。このようなネット社会の今、子どもたちにメディアを批判的に読み解き活用する（メディア・リテラシー）をどうつけていくのかが、21世紀の大きな課題である。

様々なメディアが収集され機能する学校図書館が果たす役割が大きい。

○今、子どもたちに求められているのは

メディア・リテラシーの視点から、今の子ども

たちに必要なことは何かと考えた時、下記の5点にまとめることができるのではないかと考える。

① 情報にアクセスできる、読み取る

まずは、様々なメディアが発する情報にアクセスすることができるということである。誤解のないように言っておくが、これは「コンピュータが操作できる」という意味にとどまらない。本や新聞などの活字資料から電子資料まで、様々なメディアが発する情報を読み解くことができるという意味である。

② 様々なメディアの特徴を知る

活字資料から電子資料まで、多様なメディアの特徴は何かを知り、互いに補完して使うことができる力をつける。

③ 情報を比較し分析する 裏を取る

様々なメディアが発する情報を比較し、分析する。さらに、裏をとり検証するという姿勢とスキルを身に付ける。

④ 他人との情報交換、相互批判、論議

一人で調べ、レポートにまとめるというのでは、ともすれば独善的になりがちである。可能ならば、最終的なまとめをする前の段階で、クラスや小グループで発表し、質疑討論を行うことを考えてみてはどうだろうか。意見交換の中で触発され、発見することも多いからである。それでこそ、調べ学習が深まるというものである。

⑤ 想像力、視野の広さ（別の視点）を培う

様々なメディアが発する情報を収集し、比較検討を加え、考察する。他人から質問に耳を傾け、意見交換し、アドバイスを受ける。そのようなプロセスを経る中で、視野を広げたり、「別の視点」に気づいたりする。